昭道報

Shodoho --- Newsletter of Shodokan ---

第11号
平成15年11月23日発行

＜発行所＞
関西合気道競技連盟広報部
＜発行責任者＞
中村芳勝(広報部長)
＜編集＞
昭道報編集係

富木謙治顕彰碑建立記念式典

二〇〇三年九月十三日・十四日の二日間にわたって、富木謙治顕彰碑建立記念式典が執り行われ、百名を超える方々が参加されました。

関西の昭道館メンバーは十二日に大阪を出発し、夜行列車で秋田県に向かいました。車中での様子はご想像にお任せします。きっとその通りです（笑）。秋田駅からは新幹線に乗り換え、角館（かくのだて）駅に到着したのは十三日の午前十時頃。武家屋敷など角館の町を「歴史案内人」の方々に案内していただきながら散策した後、富木謙治師範の菩提寺である天寧寺へ。そこで顕彰碑の除幕式が執り行われました。右の写真は、ちょうど除幕の瞬間です。左から二番目が富木昌子昭道館々長、その右が内山シマエ昭道館理事長令夫人、成山師範です。

その後、角館武道館で開催された記念演武会では、関東関西の学生・一般による演武、そして成山師範による演武が披露されました。

夜には祝賀会が催され、富木謙治師範の長女でいらっしゃる大倉澄子様の熱のこもったお話など、熱い熱い方々のお言葉を拝聴することができました。

十四日は、午前中に講習会がありました。運足などの単独動作や相対動作の丁寧なご説明・稽古を中心に進められました。午後は初心者向け講習会が行われましたが、昭道館メンバーは田沢湖を訪れ、きれいな景色を堪能しました。

さて、ここで問題です。角館町の特産物の一つに「樺細工（かばざいく）」があります。さて、この「樺細工」の材料となっているものは何でしょう？

カバの皮？　いえいえ、そんな惨いことは・・・。　白樺？　でもありません。

「樺細工」は山桜の樹皮を細工して茶筒や硯箱などをつくるもので、今回利用した宿の部屋にも樺細工の品々が置かれていました。土産物屋では「桜皮（かば）細工」と表示されているところもありました。ちなみに、武家屋敷が並ぶ内町には枝垂（しだれ）桜が生い茂っており、春には華麗に咲き誇る景色が見られるようです。なぜ、たくさんの桜が植え育てられることになったのかなどご興味のある方は、ぜひ、訪れてみてください。そして、富木謙治師範の菩提寺へも足を運ばれてはいかがでしょうか。

第五回国際合気道競技大会（in Leeds）

二〇〇三年八月五日から十日まで、イギリスのリーズにて第五回国際合気道競技大会が開催されました。リーズは、イングランド北部に位置する都市マンチェスターからさらに北東に車で一時間ほどのところにあります。

今までも日本国外で〝国際的〟な大会が開催されたことはありますが、今回は日本国外で開催された初めてのTAIN（Tomiki Aikido International Network）公認国際合気道競技大会です。初めての試みには何かと問題は付きもので、この大会でもさまざまな問題がありました。しかし、JAA昭道館選手団の中には、今回海外に行くのが初めてという選手もおり、特にそういった選手にとってはいい意味でも悪い意味でも大いに異文化体験ができたのではないでしょうか。

いったいどのような大会だったのか。JAA昭道館選手団メンバーのレポートをご紹介します。全部で五十ページ程あるレポートを、紙面の都合上、大胆に編集させていただきました（恐れ多くも師範の分も・・・）。

（次頁へ）

【JAA昭道館チーム選手団　宿舎前にて】

第５回国際合気道競技大会（リーズ大会）に関する報告

昭道館師範　成山哲郎
(JAA 昭道館リーズ大会選手団団長)

今大会は初の日本以外でのＴＡＩＮ公式国際大会という、大きな節目となる大会であり、その記念すべき大会の主催国として、海外では最も伝統のあるイギリスが立候補し、大会を無事に終了させたことに対し、まずは祝意を表したいと思います。大会前に世界情勢に関する諸問題が生じたこともあり、主催国としても対応に苦慮されたと思います。しかし正式に中止の決定がない以上、やはり公式国際大会を開催する準備を進め、参加予定国に対して準備の進行状況に応じた事前のアナウンスを行うとともに、常にコンタクトを取れる状態を保つことが重要だと感じました。今回の事前アナウンスは、大会概要が記載されたパンフレット一通のみであり、こういった事前の配慮は大会開催中にも大きく影響します。参加申し込み数の確定が、遅れれば遅れるほど競技のスケジュールやスタッフの割り振りが出来ず、選手やスタッフにとって配慮の欠けた大会となってしまいます。参加選手名やスケジュールの記載されたパンフレットもなく、開始時刻や終了時刻も大幅にずれ込み、食事もままならない日が続きました。そのため三日間にわたって、午前と午後の予選の間に開催されたセミナーの時間を休憩時間とする選手やスタッフも多く、セミナー本来の趣旨をまっとうできなかったことは、非常に悔やまれます。昇段審査会やセミナーの事前アナウンスも徹底されておらず、大会中に会場で呼びかけるという事態では、当然申込者はいないため、事実上ＪＡＡの審査会は出来なくなりました。世界各国の道友が参集する国際大会は、競技会は勿論、世界的な技術向上のためのセミナーと、審査会を開催することが重要であり、この三つがＴＡＩＮ会議の開催とともに公式国際大会として必要不可欠であると、私は考えています。今大会では、審査会やセミナーの時間が当初から設けられていたと考えるのは難しく、また設定時間自体にも相当な無理があったことは否めません。審査やセミナーを担う私自身でさえも、会期中に審査会やセミナーの日程を知ったという状態であったことは、まことに残念でありました。

また、国際大会中、最も主要な部分を占める競技会についても、いくつか問題点があったように思われます。前述の通りスケジュールが定まらなかったためか、競技が始まってからも最終的なトーナメント表は発表されず、選手は相当な混乱をきたしていましたし、競技開始直前にコートを作り直すという事態もありました。しかし国際競技会として何よりも違和感を持ったのは、審判とスタッフに関してです。競技を行う際に、スタッフは大変重要な役割を担います。長時間にわたって拘束されますし、ルールを熟知していなければなりません。今大会では少年部や選手の家族が、スタッフを担当されていましたが、やはり無理があるように感じました。また審判についても、今回はじめて審判をする、という審判員も多く、国際大会そのものに対する主催者の考え方の違いを実感しました。主催者側としては、今大会をスタッフや審判員の育成の場として考えていたようですが、それは違うと私は思います。国際大会が、その時の最高水準の技術を競い合う場であるためには、スタッフや審判の育成も、国際大会に照準をあわせて、地域レベルで行われてなければならないのではないでしょうか。

しかし選手達はこうした状況の中でも多くの素晴らしい技を披露していました。選手の努力に応えるためにも、役員やスタッフの意識を向上させる必要性を強く感じるとともに、今後は日本が中心となって国際審判員の組織化を図る等、具体的かつ現実的な審判の育成方法を考えなければならないと思いました。

国際大会の本旨はどこにあるのか。合気道競技にとって国際大会はどういう位置づけにあるのか。根本的な部分に認識の相違がある限り、開催国や主催者によって、大会自体が変質してしまう恐れがあるでしょう。国際大会での内容は、事実上その後の世界標準となります。ルールや種目等、技術に関わることを、国や地域の事情にあわせて勝手に変更するようなことは、絶対にあってはならないのです。タイマー表示もなく、時間計測方法も違う。得点表示もイギリス独自のものであり、得点の集計方法も違う。競技ルールが何の説明もなく変更されている。公式種目が増えている。前述の大きさの違うコートも、赤畳が足りなかったという理由で小さくつくられていたというのが現実です。公式ルールとは一体何なのか。ルールの変更は大会の一年前までに周知させよう、というルール遵守のためのルールを、前回大会のＴＡＩＮ会議で主張したのは、イギリスではなかったでしょうか。国際大会においては、世界中の道友の技術が、公平に正当に評価されるよう最大の努力を払わなければなりません。地域の特性や練習内容にあわせた評価であってはならないのです。大会の価値を決めるのは、選手の努力は勿論、指導者や役員、スタッフの考え方によるところが大きいと思います。そういった意味でも、次回大会での日本の示す方向性は注目されることになるでしょう。

日本としても次期国際大会の成功に向けて、また今後の世界的な合気道競技の発展のために、国際大会開催の意義を再確認する必要があります。世界に広まりつつある我々の合気道も、まだまだ日本が中心となって発展を遂げる必要があります。日本で開催する次期国際大会は、世界中の多くの道友に大会運営方法や審判やスタッフの技術を伝え、合気道の素晴らしさを再認識してもらう場となるよう努力していかねばなりません。

パーティーや観光も、交流の場としては大切かもしれませんが、国際大会は、世界中に我々の合気道の最高レベルの技術を発表する場であるということを忘れてはいけないと考えます。

国際大会が富木師範の理想を忘れた大会にならぬよう、我々は最大限の努力をするべきである、と決意を新たに致しまして、今大会の報告を終わります。

第五回国際合気道競技大会　報告書

昭道館武蔵野　佐藤竜一
(JAA 昭道館リーズ大会選手団副団長)

審判員のジャッジについては日本国内でも上手い下手の格差があり、度々問題となるところであるが、今大会の審判団のレベルが大変低いレベルであったことは否めない。浅い突きや姿勢の崩れた突きに対しての「突きあり」のコールは通常的であり、また徒手側が胸に短刀を付けられていても、短刀側が徒

（次頁へつづく）

手側の腕を握っていても、滅多に「体捌き指導」のコールはされなかった。他に気がついたことは、前後への体捌きが体捌きとして審判員の間で認知されていないということである。短刀側の姿勢が崩れていようが間合いが近かろうがそんなことにはお構いなく、真後ろへの体捌きや間合いを詰めるための前への体捌きを「体捌き指導」の対象にしていた。技についての判定基準もかなりなものであった。例えば小手返しをかけられた相手が転がっても判定は「有効」といった具合である。当身技で勢いよく見事に倒しても精々「技あり」までである。あるイギリス人の審判員が言っていたことだが、もし「一本」をコールしてしまうと4ポイントの得点が動くので試合の中での比重がとても重く、ミスジャッジの時のリスクを考えるとなかなか「一本」を出せないでいるのだという。審判員としてのレベルの低さと、自分のジャッジに対する自信のなさがそうさせるのであろう。返し技にいたっては見事に決まった状況でも何のジェスチャーもなかったり、徒手側が片手を両手で握っていないのに施技した返し技の効果を認めたりと悲惨な状況であった。悪いことばかりの羅列になったが、勿論審判員の中には努力を重ね、一試合一試合上達していった者もいたし、国際審判員として十分採用できる者も何人かはいたことは良い事実として付け加えておきたい。

過去四回の国際合気道競技大会においては、大会開催中に世界各国道友の技術力向上及び考え方の統一の為の講習会が開催されてきた。それは、富木先生の合気道に対する考え方や技術を浸透させるために必要不可欠なものだからである。しかし今回は講習会開催の事前のアナウンスがなく、日本からの数回にわたる問いかけの結果、何とか行われたといった状況だった。世界各国の道友の中には、師範講習会がアナウンスされていないために大会参加を見合わせた国もあったかもしれない。イギリスの審判団の何人かが、「日本で国際大会が開かれたときには多くの国が参加したのに・・・。今回は殆どの国が参加を見合わせた。何故なんだ?」と言っていたが、これがイギリスに対する世界の評価なのだと思う。過去に世界大会と称して日本で行われる国際合気道競技大会の間の年に、アメリカやオーストラリアにおいて世界大会が開催されたが、公式大会である今回の大会よりもずっと多くの国々がそれに参加し、遥かに大会として成功していたと思う。それは大会開催国が自分たちの能力を過信せず、また合気道の発祥の地である日本に対して尊敬の念をもち、協力を仰いだからであろう。イギリスは日本に次いでいち早く合気道競技が広まった国である。合気道競技人口も多い。日本以外の国で公式な国際大会を開催するのであれば当然イギリスが開催国となるであろう。しかしながら今回のイギリスのとった傲慢ともいえる態度は、日本に対しても世界各国に対してもあまり気持ちのよいものではなかったと思う。

結論的に言えば、かなり厳しい言い方にはなるが、今回の大会は決して公式な国際合気道競技大会として認められるようなものではなかったということである。審判員数不足の問題、審判員のレベルの問題（ルールの理解を含む）、スタッフの問題、試合場の問題、師範講習会に関する問題、国際昇段審査会の問題等数々の問題が浮き彫りになった大会だった。開催国イギリスを中傷する文面となったが、公式な国際大会として世界各国持ち回りと決定しておきながら協力の薄かった日本や世界各国の国々にも責任はあると思う。今回の失敗を世界各国、特に日本は真摯に受け止め対応していかなければ同じ失敗を繰り返すことになるだろう。日本の指導者たちはもっと世界の現状を良く見、理解するべきである。日本が今までリーダーシップをとってきたことに誇りを持っている人も多いと思うが、今までのリーダーシップのとり方も不十分であったというくらいの厳しい考え方で今後の対応を考えていかなければならないと思った。

リーズ国際大会参加報告

昭道館武蔵野　大森清恵
(JAA 昭道館リーズ大会選手団女子マネージャー)

リーズ国際大会に参加して、私が感じた国際大会開催のための重要なポイントは「情報管理」と「国際大会に対する共通の認識」の二点に集約されます。

国際大会は合気道競技の発展という共通の目標に向かって、言語や習慣の異なる多くの人間が、一堂に会する貴重で複雑な大会です。このような大会を、公平に円滑に運営していくためには、あらゆる情報の周知徹底とスケジュール管理の徹底、そして参加者共通の目的意識が不可欠だと感じました。今大会では、それらの点が問題になることが多かったように思います。

今大会で改めて実感したのですが、我々はどうしても競技会の内容や結果等の華やかな部分に目を奪われがちです。しかし国際大会の意義に鑑みれば、競技会、セミナー、審査会の全てが充実してこそ、本当の意味での国際大会と言えるのではないでしょうか。本当に価値のある大会とはどんな大会なのか。主催者は何よりもそのことを念頭において大会を計画しなければならないでしょう。

競技成立のためには基準となるルールと、ルールに対する理解と遵守が必要であることは周知

（次頁へつづく）

の事実です。競技ルールには合理的な理由と、技に対する共通の認識があるが故に、世界が基準として認めているのです。同様に、国際大会の運営方針にも、最低限の基準を設けることが出来るのではないでしょうか。今までも必要性と有益性の点から、競技会のほかにセミナーと審査会の開催が慣習として継続されてきましたが、合気道競技の発展にとって必要不可欠な内容である以上、この三つのイベントの開催を国際大会の要件として規定してもよいと思います。

今大会は日本以外で行われる初めてのTAIN公式国際大会であり、主催者であるBAAにとっては、良くも悪くもこのことが影響したのではないかと思います。伝統あるイギリスとしてのプライドが、大会成功に向けた努力を最後まで後押ししていたように感じました。競技会を盛り上げるエンターテイメント性は日本人には足りない部分であり、決勝戦の盛り上げ方等は素晴らしいものでした。また観客に対する意識が非常に強く、今後は国際大会が、外部に対して合気道競技をアピールする場となる可能性が高いことからも、その意識は見習うべきものだと思いました。

また、今回の審判団に対しては批判の集中するところだと思いますが、審判長をはじめとする何人かの審判員は、次から次へと起こる問題の処理に真摯に立ち向かい、積極的に技術向上と迅速な運営に努められていました。私を含めた審判員のほとんどが、国際大会の審判としては明らかに準備不足であり技量不足であって、国際級の競技会を仕切るにはあまりに稚拙であったと思います。審判に対する非難は当然のことと受け止めていますが、非難するだけではなく、この失敗の原因はどこにあるのか、という根本を考えなければ、全く意味のない失敗になってしまうのではないかと思います。審判の件だけでなく、情報管理やスケジュール管理、事前の準備等の問題点についても、常にその理由を考えることが大事ではないでしょうか。より質の高い国際大会目指そうという共通の認識は、失敗を認めた上で、より多くの関係者の間で原因と改善策を模索する中から生まれてくるように思います。そういった意味で、私自身、失敗の当事者となったことを悔やむだけではなく、無駄にしないようにしたいと思っています。

国際大会に対する共通の認識を世界に根付かせて、基本原則を確認していくためにも、最も多くの経験と競技人口を抱える日本での定期的な国際大会の開催が、国際大会の質の向上にとって、現段階では重要な意味を持つと確信しました。こうした面からも次期国際大会の開催に際しては、日本は大いなる使命感と繊細な配慮、何より強い責任感を持って臨まなければいけないと、強く感じました。

リーズ国際大会参加報告

昭道館本部指導員　酒井進之介
(JAA 昭道館リーズ大会選手団マネージャー)

選手としてこの国際大会に参加できた事は幸せであった。今までお互いに様々な場面において共に競技、稽古してきた他国の選手や役員の先生方と再び出会え、交流を持てたことは何よりも素晴らしいことだった。こういった機会を与えて下さった、今までこの組織を支えて来られた先生方に我々現役の競技選手はもっと思いをめぐらせる必要がある。

選手としての自分の結果については満足している部分とそうではない部分が入り混じっており、そういったことは次に繋げるようにしていきたい。

成山師範によるセミナーについては、講習時間が一時間半と限られていた事もあり、汗をかいて稽古するというよりは技の原理や各技が現在の形になったその説明に多くの時間が割かれた。また、十九本や十五本といった合気道全体の技の沿革も紹介されることにより、乱取としての基本の形と合気道全体の基本技との認識を新たにすることができた。

連日百人を越える参加があったが、このセミナーには特に海外からもっと多くの道友に参加していただきたかった。ここでは現在の合気道競技の素晴らしい面である稽古体系が示された。十七本や護身の形、裏技や投げの形、そして乱取はそれらが独立して稽古されるものなのではなく、それぞれの技がどう繋がっているのか、そしてそれらを十分に表現するもっとも大事な移動力や統一力をどのようにしてつけるのか、そういったことが我々の合気道の将来にとってはとても重要な部分であることをこのセミナーでは教えている。色々なものが示されたが、大事な部分は既に稽古の中に集約されている。このようなそれらを集約した稽古体系があるということをもっと多くの方が知るべきであると思う。

最後の表彰式は主催者であるBAAのとても思いのこもったものであった。民族独特の演奏に始まり、大会に参加したスタッフ、審判員、そして表彰される選手に注目が集まるように紹介がなされ、素晴らしい料理からディスコパーティーまで、とても時間と労力をかけて来られたのだろうと実感した。

ただおそらく民族性の違いもあると思うが、我々の主はあくまで競技であり大会である。その後のパーティ以上に大会自体の中身を更に充実したものに作り上げていくことが今後国際大会を開催していく各国の使命であると私は信じる。

☆成山哲也　(昭道館本部)

競技についてですが、まずは藤本さんと短刀十七本（私が受）に出場しました。競技前少し合わせた時のことです。いつものように掛けられ、一本目後ろ受身を取る、と後ろに…、滑る滑る。見た目は普通の畳なのですが、表面がツルツルというかスベスベというか、とにかく滑る、よく言えば移動力が異常なまでに発揮できる場所でした。そんな中での十七本でしたが、順調に勝ち上がり、そして因縁の相手といえるエバンスの組との対戦。結果は3対2。無念の敗退。後から思えばこの試合のとき、私はいつもより相手を意識してしまい、平常心での演武ではなかったと思います。それが敗因とは思いませんが、しかし彼らの決勝での演武を見た際、最初から最後まで自分達の演武

（次頁へつづく）

をしている姿を見て、正直少し反省してしまいました。

私は藤本さんと組んだ護身の形で決勝まで残りました。相手は宿敵・好敵手であり、前回大会で敗れたイギリスのエバンスの組、ではなくて、日本人、それも大商大の稲垣・野下組。結果は念願の優勝。結果だけ見れば最高の賞であり、やはり素直にうれしいですが、これは決して一人のものでなく、日本チーム一丸となって努力し得た結果であると思っています。また日本は他にも多く残り、賞を得ることが出来ました。その中でも特に男子乱取団体戦はとても感動しました。様々な問題がある中での試合において、お互い全力で最後まで戦い、そして戦いの後はお互いを称えあう。これこそ武道たる合気道の姿であると実感しました。

最後に、全体を通して感じたことは、今大会は様々な壁はあったものの、それに屈することなく、自分自身の力を思いっきり発揮できたことは、今後の稽古において、人生においての大きな糧になったと思います。またイギリス大会を目標にしていた安部先生の思いにも少なからず応えることが出来たのではないかと思います。また日本選手団が団結して戦えたのも安部先生の合気道にかける思いが全員に伝わっていたからだと思います。次回国際大会は日本ということなので、もっとすばらしい合気道を世界中に伝えられるように日々稽古したいと思います。それには先ず英語を勉強しなくては…

☆東 太樹（大和会）

大会で印象深かったのは観客の声援の大きさだ。特に地元イギリスの人が勝つと盛り上がるのは当たり前だが、誰かが投げたりする時の盛り上がりは日本ではあまり見ない光景だったと思う。僕も試合で投げた時にすごい歓声が起こり、とても気分が良かった。学生大会などでは歓声は起こるけれど相手の応援は静かで身内が騒ぐという感じだが、向こうは本当にみんなが歓声を上げていた気がした。

大会はなかなか盛り上がって楽しかったけれど、色々と問題点は多かった気がする。一番困惑したのが、どこで次に何の試合をするのかがとてもわかりにくかった事だ。初めに実施される予定だった事が変わっていたり、まだまだ試合は後と思っているとすぐ試合だったりと本当にわからなかった。得点のつけ方もおかしいところがいくつかあった気がするし、まだまだ問題があったと思う。

色々とあって、時間的にもなかなかハードで疲れたけれど、合気道を通して外国へ行き、そして外国人と交流できたことがうれしい。もう少し、英語を勉強していればもっと楽しいだろう。でもしゃべるのはあまりできなくても試合を通して交流できたと思う。「2年後、東京で会いましょう。」と最後のパーティーで言われたのがすごく嬉しかった。多分、合気道をしていなければ、僕はこんな体験をしていないだろう。そして僕が天理大学の合気道部に入部したのは安部先輩の力によるところが大きく、今回のイギリス大会でこんな経験ができたのも安部先輩のおかげなんだと思った。本当に団体優勝をプレゼントできて良かった。

☆河村未来（昭道館本部）

今回出場した種目は六種目。もちろん欲張りな私は全種目優勝する勢いで挑んだ。その中でも一番稽古をし、自分達の中で成長したと思われるのが、護身の形の演武である。私が取り、受けは天理大の小笠原である。初めは正直言って心配だった。しかし、なぜか気が合う。同じ「ニオイ」がするのである。天理大のパワーはすごい、と感じた。同じ「ニオイ」はするものの、自分では気付かないうちに遠慮していたようで、スピードをおさえて技をかけてしまっていた。それを感じ取った小笠原は、「私をじゃがいもだと思って投げてください。」と私に言ってきた。その一言から、思いっきり、技をかけることができるようになり、ようやく自分達の演武ができてきたような気がした。大会の本番では予選で敗退したが、自分達が稽古してきたことをすべて出し切ることができ、満足だった。

演武では、もう一つ出場した。短刀乱取りの形十七本で受けをした。取りは萬谷さんである。決勝での演武は、お互いに思いっきり攻撃し、技をかけ、とても迫力のある、女子の演武とは思わせないくらい、大きなスピードのある演武ができた。結果は惜しくも二位。相手のイギリス人はうまかった。

次は、乱取りについてである。はっきり言って、イギリスの審判員は誤審が多く、不満を感じた。このイギリスの審判への不満により、国際大会へ行ってからの、私の乱取りに対する思いは変わった。国際大会へ行く前は、単に世界という大きな舞台に立ち、優勝したいという気持ちしかなかった。しかし、今は違う。乱取りをすることによって、富木先生の生み出した合気道を正しい形で世界に広め、その魅力で競技人口を増加させたい。そう思えてきたのである。

☆稲垣智浩（昭道館本部）

自分たちが日ごろ行っている合気道が世界規模で行われ、又、他の国の人々と合気道でつながっていることを強く感じることができ、日ごろ稽古している合気道にグッと重みが増したという気がします。

又、選手以外のところで、他の国の審判団の中で佐藤先生や大森先生が様々な諸困難、言語、習慣、ルールの捉え方、の違いが山積みされている中、審判というポジションで私達選手との間に立たれ、日本と海外の合気道に関するすべての差を一身に受けられ、大会を成功させるべく戦っておられた姿が印象的でした。

そして、大会中、終始安部先生が見守る中、共に大会を戦えたことがよかったと思います。

大会を終え、日本に帰国してからも大会の打ち上げが昭道館で行われ、そこでも又楽しいひと時を過ごすことが出来ました。共に戦った選手の方、日本から応援した

（次頁へつづく）

今の私ができること。それは合気道の魅力を多くの人に伝えること。そして、合気道競技人口を増加させ、ますます活性化させること。幸せなことに、今、コナミスポーツや職場の高校で合気道を指導する機会がある。これらを利用して、魅力を伝え、技術を伝えたいと思う。このように、私の合気道について考える時間を与えてくれたもの。合気道に対する考えを変えてくれたもの。そして合気道の魅力を感じさせてくれたもの。それが、この国際大会である。第五回国際合気道競技大会に出場できて良かった。

てくださった理事長令夫人　内山シマエ様や多くの先生方と一緒に祝杯を上げイギリス大会の思い出話をし、優勝カップで乾杯し、今大会の最後を締めました。昭道館での打ち上げを終えてようやく大会の終わりを実感しました。

最後に『私たちの合気道が世界の合気道をリードしていく』という成山師範のお言葉があったように、今大会を終えて、様々な思いを込め、これからの自分の稽古の励みにしていきたいと思います。

次回日本で行われる世界大会に向けて、さらに稽古に励んでいきたいと思います。今度は世界一になってみたいと思いました。

☆植田有香（昭道館本部）

参加するかどうか、とても悩んで期日ギリギリに申し込ませていただきました。そのため練習時間がとても少なく、護身の形はパートナーの技を確認しあうレベル、自由演武は技の順番を覚えるまでのレベルの練習となり、不安を残しながらの本番となってしまいました。

自由演武は一回戦で今回の優勝組みと当たってしまい、完敗でしたが、緊張して体が硬くなってしまったものの、技を間違えずに自分達のペースで演武できたのでよかったと思っています。

護身の形は三回戦まで進むことが出来ました。2対3で負けましたが、副審をしていただいていた佐藤先生も相手側に旗を上げられていたので、正しい審査が行われていたと思え、後悔はありません。今回は自分達が練習不足であることを痛感していたので、今回の結果で悔いはありませんが、次回は勝負に欲がだせるくらい練習を重ねて出場したいと思います。

☆香川太一（昭道館本部）

リーズでの国際大会は色々な差こそあれど、自分にとっては良い経験になったと思う。その一つに、やはり異文化交流が挙げられる。

勉強になったのは何も英語で話すことだけではなくて、向こうの人達の合気道に対しての考えや技の掛け方等を、身を以て知ることが出来たのが、おそらく自分の中で一番の収穫であったと思う。…確かに一部の人達を除いてイギリスの、主にBAAの人達は、腕力に物を言わせ、力ずくで相手に「技らしきもの」を掛ける。この間には相手を崩す、すなわち「崩し」というプロセスは、全く無かったと言ってよいと思う。最初は「崩しが無いように見えるのかな」と思っていたのだが、以前はイギリスで稽古を積まれていたという高江さんに聞いてみると、どうやらBAAの人達には、「崩し」という概念そのものが無いらしい。その事実には、心底驚かされたものだった。

もちろん、これらの「やり方」は、我々が昭道館で教わる「正規のやり方」ではなかったし、自分が学生での現役であった時に培ってきたものとも違ってはいたが、違うなりに熱心に稽古を積んできているのが自分の目にも見受けられた。例えば乱取りにおいては、彼ら外人勢は、日本人に比べて体格も優れているし、筋力を主として総合的な体力が優れていると思うが、その優れた筋力や体力をより効果的に活かすための練習を熱心にしてきたものと思われた。それは腕力でもって相手を振り回し、無理矢理巻き込むタイプの少々荒っぽい脇固めであったり、完全に足を持っての正面当てであったりした訳であるが、それらの技などは、多少形は違えど、日本の学生の大会でも見られたりするということを、情けないながら今になって、やっと言うことが出来る。その時はハッキリ言って少しばかり釈然としない気持ちがあったのでわからなかった、もしくは認めたくなかったのだと思うが、安全性・競技性の面で考えれば、確かに危険であるし、厳正に定められたルールに反していると言えるが、一武道としての面で考えると、そのようなルールに反している技であっても、掛かった自分が悪いのではないか。ましてや、そのような自分に対して危険が及びかねない技であるからこそ、安全にかつ的確に捌き、その上でもって自らに有利な態勢へと相手をつくり、返し技を掛けるべきではないかと、最近になって思えるようになってきた。おそらくこれは、自分が学生としての現役を引退して、一歩離れて冷静に試合を観ることが出来るようになったからではないかと思う。そうしてみると、自分が学生の現役選手であった時、いかに未熟でルールに甘えてきたかが、よくわかる。

この考え方に到達するまでに、えらく遠回りしてきた感じはするが、この考え方こそ自分にとっての武道における方向性であるように思えてならない。この考え方は、大事にしていきたいと思う。

☆太田有祐（天理大学）

今回の大会で一番良かったことは、団体戦で優勝できたことです。日本選手団全員で勝ち取った優勝であったと思います。決勝の舞台に出られたことを自分は光栄に思いますし、あの時の空気や喜び、くやしさなどは、一生忘れることはないと思います。体格、パワーに負けていても、結して勝てないことはないと強く、自分の心の中で思えたことは、今後、自分の糧となっていくと思います。体格が全く違う者同士がお互いの技術を競い合う、今回のように「柔よく剛を制す」のような所に乱取りの魅力はあるのだと自分は改めて思いました。

今回の大会で思ったのは、日本でやっていることが、まだ外国には正しく伝わっていない部分もあるんだと、特に審判を見てそう感じました。また、自分達のやっていることを正しく伝えることの難しさを知ったように思います。いろいろありましたが、自分のやっている合気道が世界中に広まっているというのを肌で感じました。

（次頁へつづく）

☆高江美智子（昭道館本部）

主催者側BAAと国際合気道大会に対する意識の違いにより、日本からの大会参加が直前まで決まらなかったのは残念だった。そのため練習期間などあらゆる面において準備期間が短かったと思う。移動に関しても大会前日の夜遅くに到着するのは選手の体調管理面からみて良くないのではないだろうか。また、現地の状況を把握するのが難しかったのと、大会の終了時間が毎回遅れ、それにより時間がずれ込んだために、食事や入浴などの生活環境にあまり余裕がなかった。全体的にあわただしい遠征であった。

UK　SHODOKANの人達と今回の大会の感想を話しあったが、技や試合に取り組む姿勢（例えば、組み合いになりがちな乱取りの試合で崩しから技につなげ、合気道の技で試合をする。崩し、つくり、掛けの重要性の認識など）がほぼ関西と同じであった。英国のメイン勢力はBAAであるが、その中でUK　SHODOKANの人口（選手だけでなく審判が出来る人達を含む）をいかに増やしていくかを課題としていることがわかった。

大会準備や、集合、交通手段の確保など、トラブルの多い大会だったが、今後更に海外に合気道を広めるにあたって非常に勉強になる有意義な大会だったと思う。

じられたのは本当によかったです。また、外国の選手と交流をもてたことなど、今後、思い出となることばかりだったと思います。そして何より今回の大会に参加させていただくにあたって、様々な人に大変、お世話になりました。その方々の協力がなければ、このような貴重で素晴らしい経験もできなかったので、本当に感謝したいと思います。そして安部先輩と共に参加できたことが、同じ大学の後輩として嬉しかったです。きっと見守ってくれたと思います。自分が今後、合気道を続けていく中で今回の大会が何かの原点になると考えますし、この経験をすべて生かしていけるように、これからも日々精進していきたいと思います。一週間どうもありがとうございました。

☆小笠原　章（天理大学）

大会初日に出場した男女混合乱取りでは、成山哲也さんと稲垣さんとチームを組ませていただきました。一回戦・二回戦はＢＡＡのチームと対戦しました。外国の方は予想していた通り体格が大きく、力もありました。

二日目に護身の形の演武がありました。私は河村先輩の受けをさせていただき出場しました。河村先輩はいつも憧れていた方だったので受けをやらせていただくことができてとても嬉しかったです。その反面、失敗しないかと緊張しました。途中で負けてしまったのですが、勝ったＢＡＡのチームの受けは見事でした。私もきれいに見せられる受けを目指して練習していきたいです。

今回の大会で強く印象に残っている試合があります。それはキロンさんの試合です。キロンさんは大会初日に肩を怪我されて欠場されていました。しかし、男子短刀乱取団体戦では、まだ痛みがある肩にテーピングを施して出場されました。ひどくならないか心配しましたが、いつもの豪快な技がでていました。

その他には乱取り女子団体戦に出場しました。河村先輩と大商大の山崎先輩と出場しました。河村先輩も山崎先輩も大阪の頼もしいお姉さんという感じがして心強かったです。今まで他大学の方と団体戦を組んだことがなかったので、今回どんな感じなんだろうと思っていましたが、山崎先輩は人の心を和ますのが上手で違和感が全くありませんでした。結果は三位でしたが、学んだことがたくさんありました。

個人戦では、男女混合乱取戦で対戦した方とまた対戦しました。向こうの方も私のことを覚えていてくれて、最後のパーティーでは、一緒に写真を撮りました。私と同じで三年間合気道をしているそうで、楽しんで合気道をしているそうです。私も試合前になると、時々、勝つことに目が行ってしまい、楽しむ心を忘れかけたりします。彼女はとてもイキイキしていて、合気道を楽しむことをもう一度再認識させられた日でありました。

今回の大会は、審判の判定基準が違っていたりして、初日から困惑しましたが、最終的に日本の昭道館の実力を見せつけた大会になりました。私はそのような昭道館で練習ができることが嬉しかったです

☆井筒正博　（大商大）

今回の国際大会では、野下との短刀十七本に力をいれて、賞を取るために頑張ってきました。しかし、一回戦で2対3で負けてしまいました。僕は今回、これと護身の形の二種目に出ていましたが、賞をとるなら短刀十七本だと思っていたので、負けたときは本当にショックでした。周りのみんなからは「どう考えても勝ってた。」などと言われましたが、言われるたびに「じゃあ何故負けてしまったんだろう？」と悔しさが込み上げてきました。護身の形では自信のなさからか、合気道を始めてから今までの試合の中で一番緊張しましたが、師範に言われたことだけを意識し、演武することで、勝ち抜くことができました。しかし、勝ち抜くたびに、「勝ちたい！負けたくない！」という思いが強くなり、肩に力がはいり、動きがかたくなり、自分の思うような演武ができなくなりました。それでも、三位になれてとても嬉しかったです。

僕にとって国際大会は、護身で三位の成績を残すことができたし、海外の良さもしることができたし、今まであまり喋ることのなかった人やキロンやジャスティンとも仲良くなることができて本当に良かった。先のことはまだわからないけど、「また、二年後、四年後と国際大会に出ることができたら良いな」と思っています。そして、次に国際大会に出るときには、今回よりも良い成績が残せるように頑張りたい。でも、その前に、学生で最後の大会になる全日本大会で野下と優勝できるように頑張ります。

☆黒原麻美　（大商大）

八月五日、出発の日。空港で人数確認した所、一人足りない！我が大学の主将Ｎです。寝坊ではなく電車のアクシデントでしたが、二十数名いた中で一人何という運の悪さ、これから先不吉なものを感じました。途中、乗り換えのために立ち寄ったパリでは想像以上の暑さで肌が痛いほどでしたが、日本に帰ってから今年のヨーロッパの夏は異常気象で平年より十五度以上も気温が上がり命を落とした人もたくさんいるというのを聞いてゾッとしました。

そしてマンチェスター空港に到着した所で予感的中。悪いことは続くもので、そこではＮ君の荷物だけどこに行ってしまったのか出てきませんでした。気落ちする彼を慰めつつバスに乗り込みそこから宿泊場所まで約一時間半、ＴＶで見るような光景に感動し、宿泊場所につくころには時間帯では夜なのに夕方のような明るさには驚きでした。その夜コンビニに行ったのですが、何がなにやら分からない商品とお金の払い方に戸惑い、その隣の店では買ったハンバーガーの大きさと焦げ具合に衝撃を受け、初日から驚きの連続でした。

いよいよ次の日から行われた大会で、私は演武競技の自由演武に出場しました。国際大会に出場させて頂いたのはこれが二度目でしたが、今回は海外ということもあって普段の大会とは違う気持ちでした。審判員も海外の方ばかりだということもあり、周りの雰囲気も違い余計に緊張してしまったのです。日本での練習時では練習すればするほど二人の呼吸は合わなくなり、焦るばかりでなかなか納得のいく仕上がりにはならなかったのでとても不安でした。試合前、対戦表を見てみると私達の名前がないので驚きました。『まさかここまで来て登録ミス！？』と思っていると他にも何組かそういうところはあったらしいので少し安心しましたが、話を聞くと人数が多すぎて対戦表に載る為の予選があるということだったのでさらに驚きです。予想もしていなかった展開に拍子抜けした私は、不安な気持ちばかりを持って競技するのが馬鹿らしくなり思い切ってやろうという風に気持ちを切り替えることができました。結果としては二回目の試合で負けてしまったのですが自分なりに思い切りやる事が出来たので、それで負けたのなら仕方ないと思う半面、悔しさがいっぱいでもっと勝ち残って試合をしたかったのが本音でした。

初日で負けてしまったので本当なら残りの三日間はベンチでの

（次頁へつづく）

応援だったのですが、二日目の女子団体戦にエントリーさせていただいていたので幸いでした。よくよく考えてみると、合気道を始めて早四年目。一回生の全日本大会から試合に出続けてきましたが、公式戦の中でこの大会が乱取り初デビュー！何ともありがたいことです。しかし相手を見てまたまた驚きを隠せませんでした。萬谷さんを筆頭に乱取り開花中の峯・そして乱取り初心者クラスの黒原という平均身長１５０ｃｍちょっと？の３人組。対するイギリスチームは向こうでもかなりのものではないかというくらいの大きな３人組。正直、怖かったです。怖い怖いといいながら、やれるだけの事はやってみようと思い「怪我だけはしないように」というみなさんの温かい応援を背に立ち向かったのですが、何もできないまま試合は終わり予想通り勝てませんでした。普段からあまり乱取りの練習をしていないのが原因なのですが、せっかく出させてもらったのに何も出来ずじまいだった事がすごく情けなかったです。

その試合が終わってからはずっと応援でした。決勝までに日本チーム同士で試合が行われたのがいくつかありそれはすごくもったいないように思いましたが、本部の皆さん、他大学、我が大学の部員の活躍はすごいと思いました。

三日間行われた師範の講習会では、ほとんど日本語の通じない外国の方と当たり、全くと言っていいほど英語が話せない私は全て日本語付の身振り手振りで対応しました。もどかしいやら情けないやらで相手に申し訳なかったのですが、意外にそれが通じて（と思っているだけかもしれませんが）ホッとしました。海外の人は社交的で表情豊かに話しかけてきてくれるのでとても楽しかったのですが、もっとまじめに英語の勉強をしておくべきだったと後悔しました。

大会は白熱した試合に感動し、いろんな発見もできたのでとてもよかったのですが、大会以外のことも十分に満喫することができました。例えば食事。朝食が毎朝一品ずつの勢いで減るので不可解に思いつつ、逆に次の日は何が無くなるのだろうと密かな楽しみでした。観光ではコースが変更になるということでしたが、街ではなく郊外らしい山の中をバスで移動するなどすばらしい景色や教会や墓地などを見ることができて感激です。

ここには書き切れないほどの思い出がこの国際大会で作ることができました。大会で入賞することはできず悔しくはありますが、まだまだ練習不足であることを実感しました。乱取は全く自信はありませんが、形に関しては誰から見ても『あれはよかった』と言われるような演武がいつかはできるようにこれからもがんばっていきたいと思いました。

☆峯 美幸 （大商大）

毎日毎日、夜遅くまで試合があり、結構ハードな大会でした。演武競技においては楽しもうとかいい経験をしようとかいう気持ちよりも勝ちたいという気持ちのほうが強くありました。普段の国内で行なわれる学生の大会とは違い、男女が分かれていないし、不利な部分もあったと思います。しかしだからこそ、そこで勝ちたいと思っていました。だから、頑張って練習してきました。一回は勝ったものの、二回目で負けてしまいました。負けた瞬間、すごく落ち込みました。悔しくて、悔しくてたまりませんでした。でも、今考えてみると、緊張もしていたし、よく見せようと思っておもいっきりのいい演武が出来なかった気がします。悔しい、力不足でした。の一言です。

乱取り競技においては、団体戦、個人戦に出場しました。団体戦は今まで出場したことがなかったので新鮮な気分で戦うことが出来たと思います。個人戦においては負けた瞬間は演武同様すごく悔しかったです。乱取り競技個人戦は二回戦で負けましたが、自分よりもひとまわりくらい大きな相手とどう戦ったらいいかなどと考えながら挑戦者のような気持ちで思いっきり戦うことが出来たので、よかったと思います。すごく楽しむことができたと思います。でも負けたことは悔しいですし、突きなどでポイント取れなかったので、これから突く時のフェイントとか連続技と体捌きなどもっと上手くできるように練習していきたいと思います。

普段の大会では海外の選手と試合をする機会はないので、普段の国内で行なわれる学生の大会とは違った雰囲気の中で試合できたことはとてもいい経験になりました。異国の地でなんて言ってるかわからない英語でのアナウンスを聞きながらの大会でしたが、海外で試合することなんてめったにできる経験じゃないので、貴重な経験をすることが出来てよかったです。

今回の国際大会での経験を生かして、これからの大会でいい結果が残せるように頑張っていきたいと思います。

☆東野麻美 （大商大）

今年は国際大会があると言う私が今回出場した種目は山崎さんとの自由演武、乱取り個人、そして野下さん、香川さんとの男女混合短刀乱取団体戦でした。

自由演武については初めてする技が多くてそれがまた難しく、上手く出来ないので不安だった上に、他の自由演武組がどんどん一回戦突破していくのを見て試合が始まる直前は緊張と焦りですごくドキドキしました。そうこうしているうちに自分たちの番になり無我夢中で演武しました。あまりに緊張していたので一回戦は全然記憶にないのですが、旗が上がった瞬間、勝ったことがわかりすごく嬉しかったです。二回戦も勝ち、三回戦。対戦相手は、その前に峯さんと黒原さんのペアを負かせていたので少し不安でしたが、敵をとってやると思ってがんばりましたが、結果は惨敗。次はもっと自信がもてるぐらい練習して勝ちたいなと思いました。

私は今回の大会で賞を取ることは出来なかったけれど沢山のことを収穫できたように思います。それは言葉では上手く表現できませんが、すごく大事なことであり大切なことだと思います。試合に挑む気持ち次第で勝敗が分かれるというのも実感できました。それに、イギリスに行っている間や帰国後の祝賀会で普段話さない人とも話せるようになり、また話をしたことによって今まで自分が勝手にイメージしていたのと違ったその人のよさを知ることが出来たと思います。

これからまだまだ色んなことはあると思いますが今回のことを参考にしてこれからも頑張っていこうと思います。また後輩にもいろいろ伝えていけるようにしたいです。

☆大浦毅之（大商大）

イギリスに行く前に一番不安に思ったのが飛行機に乗ることでした。高所恐怖症なので大会よりもイギリスまで行くことの方が不安でしたが、なんとかイギリスに着けてホッとしました。

大会の方は、初めて演武競技に出るので緊張して、初めは体があまり動かなくて、わけのわからないうちに終わったのですが、二回戦目からはリラックスできて相方の中居とも息があって勝つことができました。

二日目は、外国の人と初めて乱取りをするので楽しみでした。外国の人はやっぱり大きくて力も

（次頁へつづく）

強くて技を出してもビクともしませんでしたが、なんとか突きで一回戦目は勝つことができました。その日は前日よりも早く大会が終わったので嬉しかったです。しかし、その日の夜、ちょっと疲れていて、ベッドの上で電気をつけたまま寝ていて、朝の四時過ぎに目が覚めました。電気を消して布団を上げて寝ようとした瞬間にチクッとして飛び起きたら見る見るうちに腕と指が腫れてきてびっくりしました。何に刺されたのかわからなかったのでかなり焦って先輩や先生方を朝早くから起こしてしまい、大変迷惑をかけてしまい、本当に申し訳ないことをしてしまいました。後々、犯人がミツバチとわかったので安心しました。その日以降は自分が部屋にいる時以外は窓を閉めることを徹底しました。

三日目は個人戦の続きで、ハチに刺されたことでちょっとやる気が下がっていたけど、がんばっていこうと思いました。三回戦目までは運が良くて有段者と当たらずに勝ち上がることができました。しかし、四回戦目で有段者と当たり、技を最後まで掛けることができずに負けてしまいました。そして「今日はもう自分の出る種目はないなぁ」と思いながら試合を見ていたら、いきなり種目別混合団体戦の体捌き競技に出ることになって、勝つことができてよかったです。飛び入りでもう一種目、決勝に出ることができ驚きました。

四日目。種目別混合団体戦決勝で、直前に体捌き競技から十七本のジャスティンさんの受けに変わったので少しビックリしたけど、種目別混合団体戦の優勝に貢献できて、本当に嬉しかったです。

このイギリスでの国際大会では外国の人ととの交流や色々な経験ができて、とても楽しく、ちょっと痛かったけどとても充実した国際大会になったと自分では思います。この経験を活かして、これからも日々の努力を怠らずにがんばっていこうと思いました。そして、次の国際大会も出場できるように自分もがんばりながら後輩にも教えていきたいと思います。

☆中居亮太（大商大）

イギリスという海外でこのような大きな大会に出るということは、合気道と出会わなければ、たぶん一生なかったと思いますし、ましてその大会で優勝出来るなんて、本当に大会に出てよかったと思いました。

イギリスというかヨーロッパには行ったことがなく、大会に出るのと同じくらい観光するのを楽しみにしていました。実際、リーズの町は、テレビや本で見るヨーロッパの町並みと同じようなレンガ造りの建物が多く、とても景色がきれいでした。

大会は大学の体育館で行われました。その大学は、うちの大学とは比べものにならないほど大きくて、でも中は、バスケットコートのあるところに畳をひいたちょっと変な所でした。僕の出場する無段の十七本は、初日の午前中にあり、緊張しましたが、それでも普段の力が出せたと思いました。やはり外人は体の大きな人達がとても多くて、ちょっと圧倒されましたが、何とか決勝にまで残ることが出来ました。予選で決勝の相手となったアレックスさんたちの演武を見たときは「本当にうまいなぁ」と思い、本当に勝てるのかと自信をなくしていましたが、あきらめずに頑張ったからこそ優勝出来たのだと思います。

そして僕がもう一種目出た種目別混合団体戦でペアを組んだジャスティンさんとは、日本で一度もあわせることが出来なくて不安な思いでイギリスに行きましたが、ジャスティンさんがとても上手で、なんとか勝ち上がることが出来て嬉しかったです。絶対に足を引っ張らないようにしようと思って大変でしたが、この種目でも優勝することが出来てとってもいい思い出になりました。

僕はこの国際大会を通してとても貴重な経験ができたと思います。まず一つは、普通に海外旅行しただけではまず話すことのないような人達と話すことが出来たし、ほとんど乗ったことがない飛行機に乗ることが出来たり、料理は決しておいしいとは言えなかったですけど、それに変わるぐらい素晴らしい景色をたくさん見られたことがとても嬉しかったです。僕は乱取りには出なかったのですが、見ているだけで自分自身勉強になりました。いずれこれら経験が自分にプラスになったらいいなと思いました。

☆ついでに編集係M

大会出場が決まった頃（大会一ヶ月前）は不摂生が原因であろう胃痛に悩まされ、強力胃薬ガ○ター10に頼る日々を過ごしていました。とても運動できる体とは思えない重〜い体。その体を健常にすべく、残業時間中に会社を抜け出して近所の体育館へ。太い柱を超重量級の外人さんに見立てて打ち込みをしてみたりして、「ごっつい外人選手と対戦してもコワくない！」と自分に言い聞かせていたら、乱取りの初戦対戦相手は細身で手足が超長な選手だった。

演武（十七本）は、変に演技ぶった内容にしたくないと思ってあまり合わせなかったら、受である河村さんの超高速な突きについていけず、一回戦では腕を掴み損ねること二回、技を忘れて間延びしないようにごまかすこと一回という散々な状況になってしまった。

それでもなんとかゲットできた今大会の入賞記念品である武士をご紹介します。

（公開競技を除く各競技共通記念品なので、入賞した数だけこの武士達をお持ち帰り。最多取得者は河村未来選手です。）

☆余談

今回のレポートの中には食べ物に関する話題も多くありました。

「パリの空港で500mlペットボトルジュースを買ったら日本の○倍の値段だったらしい。」(By 大商大M氏)

「本当はうすめてから飲むジュースを、知らずにまずいと思いながら原液のまま飲み続けて腹を壊した。」(By 本部I氏(大商大OB)

さすが関西人。金と食いもんの話題は絶えません。

身長：３０cm＋台座３cm
体重：２.８Kg
体脂肪率：０％台をキープ
スタイル：七頭身で良い感じ
腰周り：２３.５cm

台座に彫られている文字：
THE FIFTH AIKIDO WORLD CHAMPIONSHIPS
Leeds, ENGLAND 2003
RANDORI NO KATA : DAN GRADE ←ここは競技によって変わります。

大会結果

第５回国際合気道競技大会

2003年８月５日～10日 於 イギリス リーズ大学体育館

【短刀乱取競技】
[女子個人戦]
優勝 榊原早苗(JAA：駿台会)
２位 Danielle Jones(BAA)
３位 河村未来(JAA：昭道館本部)
[男子個人戦]
優勝 David Fielding(BAA)
２位 Mick Pratt(BAA)
３位 白岡岳人(JAA：早稲田大学)
[女子団体戦]
優勝 JAA：関東学連(榊原早苗・佐藤啓子・吉成洋子)
２位 BAA(Danielle Jones・Nicole Anson・Rowan Pratt)
３位 JAA：昭道館本部(河村未来・山崎文加・小笠原章)
[男子団体戦]
優勝 JAA：昭道館本部
(酒井進之介・K Felton・稲垣智浩・東太樹・M McCavish・太田有祐)
２位 BAA
(M Muharrem・M Crispini・A Tipling・D Fielding・M Pratt・S Muharrem)
３位 JAA：早稲田大学
(植木則雅・鈴木真理・大西智也・白岡岳人・平井幹久・大杉光生)

【演武競技】
[乱取基本の形十七本(無段の部)]
優勝 中居亮太・大浦毅之(JAA:大阪商業大学)
２位 Alex Gurendal・Jamie Roberts(BAA)
３位 Earon Corbally・A J Amjed(BAA)
[乱取基本の形十七本(有段の部)]
優勝 Steave Evans・Martin Livingston(BAA)
２位 萬谷久美子・河村未来(JAA：昭道館本部)
３位 藤本和義・成山哲也(JAA：昭道館本部)
[自由演武]
優勝 Mark Watson・Simon Jones(BAA)
２位 Danielle Jones・Chris Moran(BAA)
３位 David Fielding・Metin Muharrem(BAA)
[古流護身の形]
優勝 成山哲也・藤本和義(JAA：昭道館本部)
２位 稲垣智浩・野下直正(JAA：昭道館本部)

【種目別混合団体戦】
優勝 JAA：昭道館本部(中居亮太・J Gallagher・成山哲也・稲垣智浩・大浦毅之・河村未来・酒井進之介)
２位 BAA(A Gurendal・J Roberts・ S Muharrem・D Fielding・T Dean・M Patterson・M Crispini)
３位 BAA(C Moran・P Carr・G Bottomley・D Jones・S Jones・M Muhreem・A Tipling)

第三十二回 西日本合気道競技大会

２００３年８月３１日
於 山口スポーツ文化センター

【演武競技】
[男子有段の部]
優勝 白岡・大西(早大)
２位 金田・平内(早大)
３位 増田・小山(天理大)
[女子有段の部]
優勝 峯・黒原(大商大)
２位 東根・山崎(大商大)
３位 小笠原・大東(天理大)
[男子無段の部]
優勝 荒川・大丸(近畿大)
２位 澤田・辻(近畿大)
３位 香取・小坂(天理大)
[女子無段の部]
優勝 松本・赤沼(大芸大)
２位 久寿米木・竹原(天理大)
３位 松尾・石田(天理昭道館)

【短刀乱取競技】
[男子団体戦]
優勝 大和会
２位 麻生スポーツ
３位 天理大
[女子団体戦]
優勝 天理大
２位 近畿大
[男子個人戦]
優勝 平内広野(早稲田大)
２位 池田真教(大和会)
３位 織田真之介(麻生スポ)
[女子個人戦]
優勝 河村未来(大和会)
２位 大東登志子(天理大)
３位 森岡亜希子(天理大)

【短刀乱取競技】
[男子団体戦]
優勝 早稲田大
２位 国士舘大
３位 明治大
[女子団体戦]
優勝 成城大
２位 天理大
３位 明治大
[男子個人戦]
優勝 国士舘大
２位 東京大
３位 天理大(太田)
[女子個人戦]
優勝 成城大
２位 早稲田大
３位 早稲田大
４位 天理大(大東)

【演武競技】
[男子（対徒手）]
優勝 早稲田大
２位 国士舘大
３位 近畿大(岩本・福家)
[女子（対徒手）]
優勝 関学大(高浜・吉田)
２位 大商大(山崎・東野)
３位 近畿大(森・竹口)
[男子（対武器）]
優勝 天理大(小山・増田)
２位 早稲田大
３位 関学大(塚本・岡田)
[女子（対武器）]
優勝 大商大(峯・黒原)
２位 早稲田大
３位 成城大
４位 天理大(大東・小笠原)

第三十四回 全日本学生合気道競技大会

2003年10月27日 於 埼玉県上尾 県立武道館

ＪＡＡ指導部主催夏季伊勢原講習会に参加して

二〇〇三年七月二十六日・二十七日の二日間、ＪＡＡ指導部主催の講習会が神奈川県にある伊勢原市立武道館で行われました。この講習会は例年この時期に開催されており、有段者のみが参加できる講習会です。今回の講習は六セッションで構成され、学生向き内容・社会人向き内容に分けられていました。最後の一セッションは指導者研修会ということで、指導に携わっている社会人や大学の監督・コーチ対象の研修会でした。

毎年、大変蒸し暑いと評判の講習会ですが、今年は冷夏の影響もあって例年に比べると涼しいとの事。今回、初参加させていただいた私にとっては、それでも十分過ぎる暑さでした。

成山師範を始めとして、充実した指導陣の下、熱い稽古が開始されました。初日の内容は、学生対象の演武競技規定技、応用技に関する講習、引き続き、太刀・槍を中心に武器を中心とした講習が行われました。私事ですが、特に武器を中心にした技については、もっと稽古し、理解を深めておけば、より一層充実した講習会になったであろうと反省しています。

二日目は基本の十七本と十本の裏技、そして古流護身の形と続きました。私達が普段の稽古の中で必ず行っている基本動作は合気道の上達の為に必要不可欠なものであるということを再確認しました。基本の十七本の稽古では、技を受ける側の手刀は、統一力の備わった手刀である事がポイントであり、統一力の備わった手刀であってはじめて、技を掛ける側が相手を崩すことができるという事を教えて頂きました。受けの心構えとして、常に、取りに真剣に対峙し、攻撃するという事が、技の上達に欠かせないということを心に留めておきたいと思います。

今回の伊勢原講習会では、日本各地から参加された、合気道に情熱を注いでおられる多くの方にお会い（再会）し、交流を深める事ができ、自分自身の合気道に対する思いもより深まりました。そういった方々の足元に少しでも近づけるように、今後努力して行きたいと強く感じました。

（担当　伊達由美子）

関西からの参加者は、昨年より少なめのような気がしましたが、女性陣は四名と過去にない多さ（内三名が初参加！）。参加したことのない有段者の皆様。いろんな方々といっしょに稽古してみませんか？

○○○ってこんな人

いつもはインタビューアーをやっているディヴィッド。最近、パパになって忙しそうなので、逆インタビューしました。
（M･･･インタビューアー　D・・・ディヴィッド）

M「そもそも最初に日本に来たきっかけは？」

D「十二年半前に日本に住んでいた友達が誘ってくれたんだ。最初は1、2年だけのつもりだったんだけど・・・(笑)」

M「合気道以外の趣味は何？」

D「写真を撮る事。（前にも昭道報でＵＲＬを紹介したことあるけど、僕のホームページを見てね。）それ以外にもチェスも好きかな。今は両方ともそんなにできないけど。」

M「今年の九月十日に息子さん（央苑（おうえん）君）が生まれましたね。パパになった気分はどう？」

D「いいねぇ。でも、疲れるかな。妻の方がもっと疲れてるから文句は言えないけど。」

M「彼には合気道を教えるの？」

D「もちろん！　すごい柔軟性に優れてるし、木下（大樹）さんが短刀乱取りの時に出す大声よりも大きい声がだせるしね（笑）。きっといい選手になると思うな。」

M「みんなにメッセージがあればどうぞ。」

D「まじめに稽古を続けて欲しいな。僕も今はだめだけど、落ち着いたらまた稽古をはじめるつもり。またすぐに会えることを楽しみにしてます。それでは。Daddy Dave でした。」

○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

ちょいと課外稽古

なぜ、他のスポーツで「練習」と呼んでいることを武道では「稽古」というのでしょうか？

「稽古」を辞書で調べると以下のように載っています。（大辞林（国語辞典）より）

(1)武芸・芸事などを習うこと。また、練習。
(2)書物を読んで昔の事を考え、物の道理を学ぶこと。学問。学習。
(3)高い学識のある人。上達した人。

儒教の経典を「四書五経」と呼びますが、その「五経」の中の『書経』巻頭の第一句「日若稽古帝堯」が「稽古」という言葉の出典と言われています。だいたいの意味は「ここに古代の堯という帝王のことを考うるに」なのだそうです。

現代では、これを学習とか練習とかと同じような意味で使われることが多いようですが、もともとは祖先とか古人の遺業遺蹟に深く思いを寄せるという意味が含まれます。わかりやすく表現すると、「いにしえ(古)」を「かんがえる(稽)」こと。練習ではなく、稽古することで、より深く合気道のことが理解できるようになるのではないでしょうか。

Dave's one point English corner
～ Leeds ～

日本語で一番好きなところは、発音がいつも同じであるところです。“あ”はいつ使っても“あ”の発音だし、“い”はいつも“い”の発音になります。でも、英語の場合は、同じ綴りの単語でも色々な発音をしたり違う意味になったりします。

例えば、今年の８月にイギリスのリーヅ（Leeds）で第五回合気道国際大会が行なわれました。その町の名前は簡単にリーヅと読めるけど、もっと詳しく考えていったら英語の難しさがだんだん分かってきます。

このLeedsはもちろん町の名前です。でも、この単語の二つ目の“e”を“a”に変えると、発音は全く同じで意味の違う単語になります。“L-E-A-D”の意味は“担当する”とか“先導する”です。そして“L-E-A-D”にはもう一つの発音があります。“い”の発音の変わりに“え”と発音できます。　この発音をすると単語の意味も変わります。“え”の発音をすると“鉛"という意味になります。　今度はさらに鉛を意味する“L-E-A-D”の“A”を取ると、発音は変わらずに意味が変わります。　L-E-D　の意味は最初の“L-E-A-D”（“い”の発音）の過去形です。　ややこしくなってきましたね。でも、心配しないでくださいね。英語圏の人でもいつも混乱するのですから。

一方、“L”を“R”に変えるとこれまた違う問題になります。“R-E-A-D”は“い”の発音（リード）では“読む”という意味ですが、“え”の発音（レッド）では“読む”の過去形になります。どうして“L-E-D”は“L-E-A-D”（“い”の発音）の過去形になるのに“R-E-D”は“R-E-A-D”の過去形にならないかほんとに矛盾してると思います。

さらに、“L”と“R”の発音の難しさを考えると、英語より日本語のほうが話しやすいかなと思ってしまいます。もちろん、英語も文章によって、おのずと単語の意味や発音が決まってきますが、やはり同じ綴りが色々な発音をするのはとても不便だと思います。

英語の単語の綴りと意味を理解するには勉強するしかないと思いますが、発音の上達のため、次の練習をしましょう。“L”の発音を上手にするためには、最初に“N”と言ってください。すると、舌が口の上のところに付きます。この状態から、“L”を発音したら、うまく“L”の発音ができるようになります。　一方、“R”をうまく言うためには、“う”と発音するつもりの状態から“R”と発音すれば上手にできるはずです。やってみてくださいね。

編集後記

個人的な話ですが、六月は一週間、昭道館武蔵野で稽古(本当の目的は会社の出張だったのですけど)、七月は伊勢原講習会、八月はイギリスでの国際大会、九月は秋田での富木謙治師範顕彰碑記念行事、一般社会人稽古生としては、かなり合気道関連の旅行が多かったように思います。(そういえばいずれの場所でもS先生・O先生にお会いしました。また、昭道館武蔵野の稽古に参加させてくださいね。)

ついでに昭道報も八月に続いて十一月に発行。充実しすぎて何が本業なのか見失いそうになります(笑)。　でも、それだけたくさんの方々と接することができるという嬉しさがなんとも言えません。

これからも皆様の温かさに応えるべく、いい内容にして行きたいと思っておりますので、ご意見・ご感想をぜひお寄せください。お待ちしております。

E-mail: shodoho@infoseek.jp
または、直接、昭道報係まで。
中村　芳勝(責任者)
山形　忍(編集長)
ヒッグス　アラン
グレブス　ディビット
伊達　由美子
萬谷　久美子

今号の特別協力者
高江美智子さん・大西美緒さん
どうもありがとうございました。

From the editors

If you have any requests of people you'd like to know more about please let us know.　We will also try to answer any questions you may have concerning Aikido waza by going directly to the source, the teachers, in this newsletter.
We eagerly await your messages.
E-mail: shodoho@infoseek.jp

The interviews
--- Interview with member of Shodokan ---

In this issue of Shodoho, we speak to David Graves. Yes, he is usually the interviewer of this corner, but this time he is the interviewee...　(Ｉ－Interviewer,　D－David)

Ｉ:For what purpose did you want to come to Japan?
D:I came to Japan 12 and a half years ago because a friend who was already living here invited me.　I thought I would stay for one, maybe two years at the most.　WRONG!
Ｉ:Do you have any hobbies　besides　aikido?
D:Yes, I　enjoy taking pictures (please look at my website http://groups.msn.com/ShodokanAikidoPhotos/shoebox.msnw) and playing chess, neither of which I'm doing much of right now.
Ｉ:Your son, Owen,（央苑）was born on September 10th of this year. Congratulations! How does it feel to be a father?
D:It feels great, except that I'm tired all the time.　But my wife has it much worse, so I can't complain.　I still do though.
Ｉ:Will you teach him aikido?
D:Of course!　He is already very flexible, and has a very strong scream, better than a Kinoshita tanto strike, so I think he will do very well at Aikido. His footwork needs a little practice but he's trying hard.
Ｉ:Any message to our readers?
D: I hope that everyone is continuing to train hard.　I miss not going to the dojo but once everything settles down at home I will start to train again.　I look forward to seeing everyone again soon!　Peace、Daddy Dave

(Continue from page 14)

lack of communication between them and the hombu dojo

Later I found out that the Shodokan members and the BAA were slightly different, and certain hostilities were evident between them. As I know nothing of the history it is not my place to comment, however if the tournament were ever to be held in the UK again it would be nice if the British Shodokan members had more to do with the organisation.

For such an event I thought that there was very little publicity and advertisement that I was aware of. Of course media such as the Internet is an invaluable source and I would like to have seen some more publicity here. Especially as emails only take seconds to send I thought there could have been a lot more hype about it.

The organisation of the tournament itself was a little disappointing. I know it must be difficult to organise such activities, especially when different event are being held at the same time. On some occasions names were being called simultaneously on two different mats, and generally the organisers were a little confused themselves.

At an event like this a decent PA system would have been useful. The one used was a little weak and many people had trouble hearing the announcement. Putting up papers on the wall about the forthcoming events was a good idea, however they tended to be inaccurate. Some kind of large notice board would have been a useful aid so that all could see what was happening.

I was happy to attend this tournament as I was able to meet some people that I had only heard about. It was also important for me because when I eventually return to the UK I want a solid teacher, and this was my chance for me to find someone I would like to train with. The location of a good teacher and dojo may affect my future quite substantially. As yet I am undecided.

It was great that I was able to participate in such an occasion with the Japanese team and especially Shihan. It was a very educational experience for me and I learnt a lot from it.

I especially look forward the next tournament in Tokyo, and hope that I will be able to participate. This means that I must train hard for the next two years and I am glad for the challenge. Also I believe after Japan the next tournament will be held in America, again this should be a great experience travelling around the world to take part in the International Aikido Championships.

- Results-

【Randori No Kata (Kyu)】
1st Ryota Nakai and Takayuki Oura (JAA Shodokan)
2nd Alex Gurendal and Jamie Roberts
3rd Eamon Corbally and A J Amjed

【Tanto Randori No Kata (Dan)】
1st Stevie Evans and Martin Livingston
2nd Kumiko Mantani and Miki Kawamura (JAA Shodokan)
3rd Kazuyoshi Fujimoto and Tetsuya Nariyama (JAA Shodokan)

【Open Kata】
1st Mark Watson and Simon Jones
2nd Danielle Jones and Chris Moran
3rd David Fielding and Metin Muharrem

【Dai San Kata】
1st Tetsuya Nariyama and Kazuyoshi Fujimoto (JAA Shodokan)
2nd Tomohiro Inagaki and Naomasa Noshita (JAA Shodokan)
3rd Masahiro Izutsu and Masayoshi Miyamoto (JAA Shodokan)

【Women's Team Tanto Randori】
1st Sanae Sakakibara, Keiko Sato and Youko Yoshinari
2nd D Jones, Nicole Anson and Rowan Pratt
3rd Miki Kawamura, Fumika Yamasaki and Fumi Ogasawara (JAA Shodokan)

【Women's Individual Tanto Randori】
1st Sanae Sakakibara
2nd Danielle Jones
3rd Miki Kawamura (JAA Shodokan)

【Men's Individual Tanto Randori】
1st David Fielding
2nd Mick Pratt
3rd Taketo Shiroaka

【Men's Team Tanto Randori】
1st S Sakai, K Felton, I Inagaki, T Higashi, M McCavish, Y Ota(JAA Shodokan)
2nd M Muharrem, M Crispini, A Tipling, D Fielding, M Pratt, S Muharrem
3rd N Ueki, S Suzuki,T Ohnishi, T Siraoka, M Hirai and M Ohsugi

【Kongo Dantaisen】
1st R Nakai, J Gallagher, T Nariyama, T Inagaki, S Sakai, T Oura and M Kawamura (JAA Shodokan)
2nd A Gurendal, J Roberts, S Muharrem, D Fielding, T Dean, M Patterson and M Crispini
3rd C Moran, P Carr, G Bottomley, D Jones,S Jones, M Muhreem and A Tipling

The Unveiling of the Tomiki Shihan Monument

The Tomiki Shihan monument unveiling ceremony was held in Kakunodate-cho, Akita on September 10th.
The ceremony was held in The Tenneiji temple. After the ceremony, a martial art performance was held in the nearby budo hall, with Nariyama shihan and Shodokan members showing an aikido demonstration.
The celebration party was held that night with Ms. Masako Tomiki, the JAA Chairman, and many other invited guests.
An Aikido seminar was held at the next day and many people participated.

The 5th International Aikido Championships in England

The 5th International Aikido Championships was held in England, this past August. Players from around the world participated. Although there were many problems during the tournament, such as the level of the referees and record keeping members, I think the staff worked hard over a long period of time every day in order to make the tournament go well. The following are reports of those who participated in the Championships

「Summer 2003 Aikido Championships」 Alan Smith (Shodokan Honbu)

The Fifth Aikido World Championships Tournament was held in Leeds, United Kingdom from 5th August 2003 - 11th August 2003. Over the five-day competition more than one hundred and twenty players from more than seven countries competed in eleven events. Players travelled from as far away as New Zealand and Japan to attend the event. The Championship was possibly the largest Aikido competition ever held in the UK. Over the course of the competition, approximately two hundred spectators viewed approximately one hundred Aikido matches. To fully appreciate the background to the summer 2003 competition, it may be best to elucidate how Aikido was introduced to the UK and how Aikido practice was started there.

Speaking from my own point of view and from how I think I would have seen the competition had I never seen Aikido before, I think the greatest disappointment concerning the competition was the lack of affability amongst players. Aikido exponents at the competition often seemed impolite and reluctant to participate with other players depending on their perceived political affiliation. Obviously, where a large communication barrier exists, Aikido players from different countries may be unable to mingle at ease. However, there was a very large number of people who seemed unwilling to participate inclusively, despite the relative lack of communication problems.

I still feel embarrassed about the treatment of some guests by the British hosts. It has already been stated that there were some problems concerning the accommodation. Perhaps there could have been a greater attempt to make foreign guests feel more welcome. I also felt highly embarrassed at times by the approach of certain players towards the judges/ referees.

A major disappointment for me was the refereeing. This is not because I lost my single match but because I hoped to clarify in my mind the role of refereeing. Those judging and refereeing matches, did, at various times, seem to lack any confidence regarding decisions they made. Games were often stopped for extended periods whilst judges and referees consulted. This slowed down the pace of some matches and left spectators bored or unimpressed. I have personally been trying to promote competition Aikido amongst Ulster Aikido exponents but the majority of practitioners are still unimpressed by the spectacle of competition Aikido; although they still enjoy competition training. As a result of the refereeing, I am still unsure as to the rules regarding the catching of an opponent's leg. There were numerous occasions, including my own match, where uke (tanto holder) was thrown or unbalanced with some sort of atemi waza whilst his/ her leg was being held (usually behind the knee) by tori. I also noticed that many players who performed this type of technique put a great degree of emphasis on catching the back of the knee. Tori would perform some sort of kuzushi to bring uke forward and then as uke takes a large step forward to neutralize the kuzushi, tori would grab uke's front leg behind the knee before proceeding to push the head back with a powerful driving atemi waza. Thus some players were putting more emphasis on the leg catch as they would attempt this first, rather than the actual atemi waza. Such players were not penalized for performing this technique.

「The 5th International Aikido Championships」Justin Gallagher (Shodokan Honbu)

This is a report concerning the International Aikido Championships held in England, August 2003.

This was my first competition, hence my opinions may be superfluous.

At first I was happy that my home country had the honour and privilege to hold such an event. I had no relations with the Aikido associations in the UK and did not know who would be in charge organising the tournament. As the event approached I became disappointed in the method that was being taken by the organisers in Britain, and the

(Continue to Page 13)